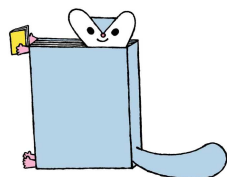


短歌ブームに思う



2023. 4. 1
美幌町図書館長 竹花 史康

今、学生時代からインターネットやパソコンのある生活環境の中で育ってきた世代、いわゆるZ世代のなかで、短歌がブームになっているようです。つい最近、NHKのクローズアップ現代でも特集されていました。

その理由について、東洋大学「現代学生百人一首」選考委員の高柳祐子准教授によると、「気軽に挑戦できる長さという点で、SNSと短歌は似ている気がします。短い文章に慣れたZ世代と、三十一文字で自分の思いを表現できる短歌は親和性が高いのかもしれない」と述べています。

また、伝統的な和歌が個性よりも調和や伝統を重んじるのに対し、現代短歌は個人の体験や感性を織り込んでいるのが特徴と言われています。そこで、春をテーマにした、現代短歌と伝統的な和歌の作品を紹介したいと思います。



ハグをしてそれぞれの道をいつかまた
それでも春を嫌いになれない
旭川実業高等学校1年 吉田可琳

久方の光のどけき春の日に
しづ心なく花の散るらむ
百人一首 紀友則(きの ともり)

若い人の短歌は、ストレートでわかりやすく、そのことが共感されているのかもしれない。

ちなみに、紀友則の解釈はというと、「光ののどかな春の日に、桜の花はどうしてこんなにも落ち着いた心もなく散っていったらしょうのだろう」で、古風でたしかにすてきな短歌です。